大学版画研究会 会報 12

1984.8

木版画編

▶木版について

吹田文明

1983年11月、若山八十氏さんが逝かれた。11号会報に「我々の孔版画」の原稿をいただいたのが最後になってしまった。日本の謄写版画のひとつの時代が終ったように思う。その偉大な業績を偲ぶと共に、心から哀悼の意を表したいと思います。

—東洋的木版—　会報12号は木版編である。多くの版種の中でも時に板目木版は印刷としての合理性に欠けている。見当ひとつをとって見ても、エッチングやリトグラフの針見当に比べ、カギ見当、引きつけ見当と、合理的と言うよりも視覚と感覚によって重ねて行く、プレートとなる版材も、和紙も、バレンによる圧力も総て均一性の薄いものである。それを油性では無く水性インクで刷るのだから、まったく同一の刷り上がりを求める方が不都合のようにさえ見える。このことが日本を中心に東洋のごく一部でしか水性木版の行なわれない理由である。中国では日本の水性木版以上に、感覚的で精巧な技術で複製木版が行なわれている。中国美術工芸品で、肉筆画と思って木版複製画を買入してくることさえある。十竹斎書画譜の中で、竹譜を見ればうなずけることであるが、刷り台の前に手本になる絵を置き、見ながら日本で言う「あて無しぼかし」のように調子をつけて版木で絵を描くように刷る。バレンもそれに則して柔かく、にじみの部分までも複製するのである。勿論、複製だからナンバーはつけない、同じ技法でも版画とは区別されている。

—ナンバーについて—　パリの有名な画商ウォラールが商売の為に考えだしたと言われる版画作品のナンバーの記入も、東洋と西洋では大きくその意味を異にしているのではなかろうか。正確に同一に刷る合理性を追及する西洋的なリト・エッチングの場合は、同一である為にナンバーによって区別するが、変化を来たらす水性木版は、同種の版である印の為にナンバーを入れると考えると、西洋的合理主義と東洋的な感覚の世界が判然と見えて来るように思われる。日本の木版画家達がナンバーを記入することが一般化し始めるのは昭和30年以後である。棟方志功、川上澄生もナンバーにはあまり興味をしめしていない。

—創作版画の意味—　諸外国と日本の版画の最も異なる点は、日本における創作版画運動である。近代印刷の流入によって消えて行く版本制度を、自画、自刻、自刷りの創作版画の提唱によって、印刷を画家による手作りの芸術に変貌させた時点で、工房形式を持ち続けたヨーロッパや中国とまったく異った意味合を持つことになる。

版画は版でつくった絵画でも、絵画を量産する手段でも無く、版画はそれ自体、独立した表現である。それは創作版画の意味する所で、日本に版画家と言う特意なジャンルの作家を産み出す結果にもなった。持論その頃は木版画が主流であるが、昭和30年代は今日よりももっと自由に版による独自の表現や可能性が盛んに追究された。1957年、東京国際版画ビエンナール展が始まり、出品規定で「モノタイプおよびこれに類する一板刷り版画は除く」と言う頃からオーソドックスな版種に進み、1972年、第40回日本版画協会展による実験的な試みを最後に急速に商業主義的になり、勇敢な実験や試みは影をひそめてしまった。オーソドックスで、技術だけが量産され一般化する中で、絵画やデザインを版画手法で量産することが盛んになり、版画独自の表現は益々希薄になりつつある。このような現状から、我れ、我れはどのように脱出しうるのか、創作版画の提唱によって印刷を芸術に変貌せしめた先輩の英知を学ばなければならないと思う。

▶版画考 —油性木版について—

●私の技法　　丸山浩司

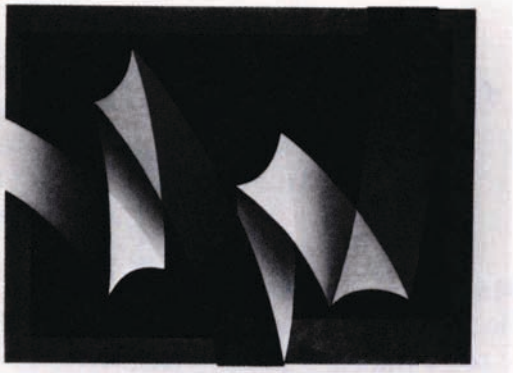
（カッターで切り抜く幾何学風景）

木版画は数ある版画技法の中で最も伝統ある技法である。歴史的にその起源をたどると紀元前にまでさかのぼる。そして我国では江戸時代の浮世絵版画において隆盛を極め今日に至っている事は周知の事実である。この木版画を表現メディアに選択した者にとっては、この伝統を無視することはできない。そればかりか、長年の間に培われた木版画のマチエールの美しさに魅せられた作家や鑑賞者が計り知れないほど存在する。

しかし木版画における和紙（楮、三椏を主原料とした）と墨（水千顔料）と木材（桜を中心とした）という素材の面での結びつき、あるいは用具の面での伝統性にこだわることは、木版画の表現の可能性を狭くしているように思えてならない。そこで私が取っている方法であるが、その前になぜ木版画を表現のメデイアとして選択したのか、その理由を少々述べてから私の技法についての解説を進めたい。

私の場合、木版を始めてから9年の月日が経つが、以前は油彩画を描いていた。キャンバスの表面に絵ノ具を付けた筆で直接描いて行く作業の中での一番の問題点は、その日のコンディション、あるいは感情の移ろいといったものが色濃く作品に表れ、表現が諄くなりがちであった。以前からモンドリアンの作品に憧れていた私は、あの枯木の写生から始まり、省略、強調、抽出を繰り返しながら、コンポジションの作品へと昇華あるいは純化させて行った抽象の形成へのプロセスが頭から離れなかった。そしてちっぽけな自己の感情に左右されるような表現にとどまらず、もっと普遍的な表現ができないものかと悩んでいた。そんな時、版画を学ぶ機会に恵まれ、版に表現を委ねる間接表現としての可能性あるいは感情移入を排除したスカッとした均一な色面効果といった版画の特徴と自己の摸索していたイメージが一致し、今日に至ったのである。数ある版画技法の中で木版画を選んだのは、材料、用具、設備といったものが他版種に比べ手軽で特別な環境を必要としないことも、なによりも、木の感触が自己の体質に合っていた事である。

私の作品は眼の前に展開される様々な風景を再構成したり、合成あるいは省略、強調を経て曲線だけによってより普遍的な風景画を表現しょうとしている。そこで私の技法であるが、曲線の形態美と色彩のハーモニーといった2つの要素を中心に展開しているため、木版画で表現する場合、水性絵具では色彩に発色の強さがない。そのため市販の油絵ノ具を使用している。また曲線の形態美を表現するために、彫刻刀で木材を彫ったのでは、思うような強い輪郭線(ハードエッヂ)を表現できない。そこで薄いベニヤ板（厚さ2.7㎜）を



大きめのカッターナイフで形を切り抜き、台紙となる別の板に貼り付けるようにしている。

市販の油絵ノ具はそのまま使用すると、紙が油焼けを起こしたり、またローラーで絵ノ具を均一に延ばそうとすると粘気が少ないため思うようにならない。そこでまず、新聞紙の上にチューブから絵ノ具を出し、一昼夜放置し油抜きする。そしてリトグラフ用のメディウムを絵ノ具の⅓ぐらいの量にして混ぜると、その欠点を補うことができ、優れた木版用油性インクに変貌する。油絵ノ具はどこの画材店でも手に入れることができるし、優れた顔料を使用しているので、発色の良さや色数の豊富な事は今さらここで特記するまでもないだろう。

薄いベニヤ板を切り抜いて版にする方法は2つの利点がある。まず第1点は先ほど書いたように強い輪郭線を表現できるので、構成主義的な作品や、色面効果を狙った表現に向いている。2点目は、木材を彫り込んで行く一般的な木版は不必要な部分を取り去って行くマイナスの作業となるが、切り抜いて別な板に貼り付けて行く切り抜き法はプラスの作業となり、ある程度の作業の能率アップと合理性を持っている。ただ欠点もある。一つは一般的に彫刻刀で彫り込んで行く方法では、俗に「枕」と呼ばれる部分があって、紙が彫り込んだ不必要な部分に落ちないようになっているが、切り抜き法では必要な部分しか、木を貼り付けないため、周りについたインクを良く拭きとっておかないと汚れの原因となる事が多い。また見当のズレもしばしば見られる。台紙となるべき板に版下をトレースをする時、あるいは切り抜く板にトレースをする時、台紙板に切り抜いた版を貼り付ける時というように、ズレの原因となる機会があまりにも多い。

しかし木版の油性インク刷りは、発色の強さと同時に大作が可能であるという特徴を持っており、現時点での表現メディアとしては最良の方法であると考えている。先日、水性と油性絵ノ具の併用によって制作し、一応の成功を見た。今後も様々な方法の実験、研究を進めて行きたい。

インタビュー《小野忠重先生を囲んで》

出席者　小野忠重

吉本　弘
山本富章
設楽知昭
加藤茂外次

《陰刻法の生まれて来たところ》

小野－あの終戦の年の3月10日東京大空襲で焼け出されて岡山県の津山へ疎開したんです。それから東京へ、もういっぺん戻るんですけども。家に入ることは簡単にいきません。我が家の土地は自分のもんじゃない。建物は親から貰ったものが、あったんですけれども、結局人に入られちゃったんですよ。自分の家へ戻って来ることが出来なくなって、ふらふらしている時期が、終戦の直後にあったわけです。

そんな時期に、あの……四谷見附の美術出版社の前を通りかかって、前にここと少し関係があったもんで、まあ、懐かしかったもんだから、入り込んだら、社長の大下正男、その協力者の藤本韶三が、色々と話し合ってるところだったもんで、久しぶりだなっていうようなことで、まあ、どうだ、手伝わないかっていう事になってね、美術出版社を。まあ、手伝うようになったわけです。

で、まあ、あたしの事ですから、営業関係はとても出来ないんで、つまり、出版の……、出版も、編集もあれば営業もありますが、その……編集の方の関係でね、お手伝いしましょうっていうような事になって、そもそもの、最初の仕事が、洋画技法講座なんです。早い時期の仕事だったんです。

それでまあ、随分……

吉本－美術手帖より、早いわけですね？

小野－ええ、美術手帖よりも、早かったですねえ。洋画技法講座の事だから、当然、洋画の関係ですけどもね、当時知名なあらゆる人を、訪問して、結局そういう人たちの仕事をやってもらって。

例えば、静物画なら、静物画を描いてもらうとか、ま……伊藤廉先生なんかの場合には、静物をね、担当してもらったわけだけれども、そのほかに、小磯先生ならばね、やっぱり人物をね、描いてもらうとか、そういうようなことをやっていただいて、そして、それを……例えば絵具なら、今度は、エローオーカーを取って、エローオーカーに、少しホワイトを混ぜるとかなんとかいうことを、そばで見ていて書き留めるんです。

御自分では、殆ど無意識に、やられることなのですけれども、そばで見てて、あ、今度はあの……エローオーカー取ったな、あ、ホワイトを取ったなっていうような事を、自分でノートしてね、そして文章にしていくというような、そういう仕事が、あたしの仕事だったわけですよ。

吉本－すいません、そうすると先生は、小磯先生なり、伊藤先生なりの、御宅へ伺って……

小野－そうそう、行って。

吉本－先生が絵具を取るのを、御覧になりながら、

小野－そうそう、で、ノートして。

吉本－ノートされて、

小野－ええ、そうそうメモしてね。そしてまあ…

吉本－実際の作画に立ち会われたわけですね、

小野－そうそう。帰ってから、殆ど、徹夜でそれを纏めてね、それで、御当人に見せたりなんかして、一応の原稿、よろしいって事になって、そして、印刷に進めて行く。そういう仕事をやってたわけです。

そういう中の一人にね、須田国太郎先生が、居たわけですよ。須田国太郎先生からね……、その洋画技法講座に書いてあるかどうか、判らないけどもね、あの…… スペイン・カンバスの話しを私は聞いたわけです。スペイン・カンバスてのはね、実際は、先生がお話しなすったのは、その通りかどうか判らないけど、あたしの、受け取った気持ちではね、とにかく……黒い、暗い色のものです。

普通ならカンバスってのは白いもんでしょ。

白いのに、木炭で描いて、そして、例えばセピアみたいな色で、こう塗って、そして、だんだん

描き起こして行くっていうような、そういうような描き方ですね。

それが、あの、スペインのカンバスは、黒っぽい生地のカンバスで描いて行く、そういうテクニックだっていうような事をね、ちょっと、あたしは、聞いた記憶があるんです。

戦争前にも生き生き版画をやってましたからね。その時分には、陰刻多色刷の方法じゃなく、白い紙を使って、やっていたわけですけれどもね。

う一ん、ちょっと考えてみたら、

あっ　そうか、黒い紙を使って、そしてその上に、つまり、彫った版を刷るのに、明るい色でもって刷ってけば、それでも、一つの作品が出来るんだなあという事を、ふいっと、考え付いたわけですよ。

そして、そういう場合に、彫って行く版はね、つまり、自分で刃物が、謂わば筆のような気持ちでもってね、自由にこう使っていけるんじゃないかというような事をね。

左右は逆になるかもしれないけれどもとにかく自由に使って行けるようなね、そういう印象を私は受けたわけですよね。

そっから思い付いて行ったのがね、陰刻法の始まりです。私の。

吉本－あっ、そうですか……。彫った所が、結局、黒く……

小野－そう、要するに、凹みの所ね。その凹みの所が、紙の生地ですから、それを、当然、版木を使うとすれば版木が、明るい色を。え一、紙そのものは黒っぽい紙を使うわけでしょ、だから、それよりも黒い（暗い）色を使うわけには行きませんからね、だから、明るい色を使ってやって行くというのが。それが、陰刻法の多色刷りというやり方ですね。

まあ、極めて、簡単なもんなんですよ。

ただその場合の、彫りっていうのは、あくまでも、刃物を。刃物を中心にし、刃物を主体とした、この……やり方ですからね。単なる刃物でなしに、刃物そのものが筆の役割をするというような気持ちでもって彫っていくって事が、私は必要だというふうに、ま、解釈したわけです。

で、ヨーロッパでも、そういうような方法があるんですよ。

フランスの早い時期にも。筑摩書房から出た、〈世界版画大系〉第一巻なんかに載っている作品で、そういう例があります。

山本－あの……、古い感じのニエロ版とか……

小野－そう、そうそう、うん　そう。

山本－あの時代にもうあるわけですか？

小野－そうですよ。

ニエロ版なんてなそうですよ。

ニエロ版なんてのはね、大体がね、こう、金属板を点で突いて凹みを作って行ってるんです。そして、それに、あの……明るい色を着けて。刷る素地には、暗色地を使って、それに、凹みを作った版には明るい色を着ける。色の材料と糊気のものと混ぜて、ずっと叩いて、着けて行くわけですよ、絵具を。そして、固着するんです。布地なんかにね。

それが、ニエロ版なんですよ。

山本－あっ、そうなんですか。

加藤－あの……今朝見てた。あの。

小野－そうそう。

加藤－あの白黒反転した。あれ……

小野－そうそう、そうです。ええ。

加藤－そうすると、向うのは金属板から、そういうのが始まったわけですか。

小野－やってるわけですね。そう。

山本－木版の場合っていうのは、おそらく、小野先生が……

小野－いや……。

山本－最初の？

小野－いや、そんな、自惚れる必要はないけどね。ま、ま、やった事は確かです。ええ。

山本－結局あの……、今、僕達の、小野先生っていう見方をしますと、小野先生イコール陰刻の版画っていうふうに、思ってしまうんですけれども、それっていうのは、やはりそういう見方をして、間違いないというか、小野先生が、こう50年なら50年……

小野－そうそう。確かにね、やった事はそうです。戦前には無論やってませんよ。戦後になってからね、今申し上げたような事でね。

あの……美術出版社に勤めてた時にね。

ま、此の頃の編集者っていうのはね、そんな気持ちは無いのかも知れないけれども、まあ、あたしも、これは、あの洋画技法講座の頃は、新しい勉強だと云うような気持ちを持ってましたからね。だから、あの……、先生方を訪問して、そして、教えて貰うんだって云うね、気持ちをね。

それをまた、大勢の人にね、伝える。

そういうような、なんてかその……、間に立つ人と云うようなね、そういう様な気持ちを持ってましたからね。ま、謂わば、謙虚にね、学んだわけですよ。

そういうのの一環としてね、あたしは、確かに、あの……、或いは、細部の問題は、多少あたしの受け取り方と、先方が、おっしゃった言葉とは違うかもしれませんけどもね。

私は、確かにね、陰刻法の思いつきのきっかけは、須田国太郎先生からね、伺ったわけです。

山本ーなんていうのか、全く版画の世界ではなくって、そういう、逆に、油絵の伝統的な技法の……

小野ーうん、そうなんです。

山本ーその、関わり方っていうものが、すごく、こう……初めて伺ったんですけども、なんて云うのかなあ、おやっていうような感じの所なんですね。正直な話。

小野ーそうですよ。

大体、須田国太郎先生はね、美術出版社から出す予定で、その時点ではまだ出していなかったんですけど、その後直ぐ出ましたけどもね。ゴヤの研究書を一冊書いていらっしゃったんですよ。それで、それをあたしが、見てましたしね、それで、非常に、敬意を表したわけですよ。

で、おそらくゴヤなんかのカンバスが、そういうようなもんじゃなかったかなっていう風に。いまだに頭には在りますけどもね。

山本ーあの……、暗い絵ってありますよね。ゴヤの。

小野ーええ、そうそう。

山本ーおそらく、あれなんかの事に通じるんでしょうかね。

小野ーそうだろうと思いますよ。

〈将軍とカラス〉

吉本ーあの、〈将軍〉[1] とか……、あれは戦前……

小野ーええ、そうです。

吉本ーですね。

小野ーあれをやったのはね、そうあの、2・26事件のあった年ですけどね。

う一ん、今は何て云う名前になっているか判りませんけども、松沢病院と云うのが東京の世田谷にあったんですよ。

そこにいた誇大妄想狂と云ってましたけどね、たずねて行くと、行きなり、胸を反らしてね。刺語なんて云うのを渡してね。お前を、え一、なに大臣にするとかね、総理大臣に任ずるとか書いたやつを、渡してるような奴が居たんですよ。

まあ、戦争で、おそらく、死んじゃったと思いますけどもね。それにあった時、あの、ビラビラ、ブリキの勲章をぶらさげてね。いかにもこう。

まだ、そんなに、激しく戦争が進んでいない時分だったけれども、日本の、こう、何か先行きが、こんなふうになるんじゃないかっていうような気持ちがしましてね、それでまあ、ちょっとやってみたわけです。ええ。

あれは、陰刻法じゃないですよ、ええ。

吉本ーカラスが、色々なところに出ますが、

小野ーう一ん、カラスの扱い。

動物の扱いは、よく、まあ皆さんから注意されるんですけどもねえ。だいぶ昔人間ですからねえ。

昔の、歌人なんかからも多少もらったものがあります。石川啄木なんかの時分の人で、あの……、「幾山河越え去り行けば、寂しさの、果てなん国ぞ、今日も旅行く」[2] をつくった若山牧水。

あの作家の、大正初めの歌集「死か芸術か」てのがあるんです。なかなかそう簡単に。作品が重ったからって、生活が楽になって行くって云うわけにはいかないですね。時に、死を覚悟するって云うような事も、あったんだろうと思うんです。

あたしは、そう解釈してるんです。

この歌集のなかに……

「横浜の、波止場の果てにカラス居て、カラス動かず、我も動かず」[3] て云うのがあるんですよ。

吉本ーカラス動かず、我も動かず……ですか。

小野ーこれはね、あの、石川啄木の「大という字を百ばかり、砂に書き死ぬことを止めて帰りきたれり」[4] と同じようなものと、私は受け取ってるんですよ。牧水のこの歌集が出た時よりずっと後ですが、この歌を知って、要するに動物も、鳥も、やっぱりなにか、心の往きかいを持ってるんだなあっていう事を、こうね、ふいっと、まあ感じたわけですね。

牧水のこの歌には画面が浮んできますね。海につき出た波止場の先にポツンと鳥がいる。そんな風景です。つまり心象風景なのです。

そしてふいっと、やっぱり動物を置くのを思いつく、自分なりにね、勝手なあれですけどもねえ。動物を画面に置くのも、勝手に自分でやるようになったわけですね。
吉本ーああ、そうですか。
小野ーうーん。
山本ーカラスなんかも、ある意味で、象徴的な意味合いを……
小野ーそう、そう、
山本ー……持っているわけですね。
小野ーうん、うん。

〈版画は半画？〉

山本ーちょっと話しが前後してしまうかもしれませんけれども、小野先生が、回顧展をなされて、まあ、先生が、最初に版画というものと……関わり始めた頃というのは、我々は生まれてないわけですし、その、実際にその世代も知らないんですけれども、
小野ーうん。
山本ーそういう時の、創作活動っていうんですか、その、版画をして行くって事は、どんな状況だったんでしょうか？
小野ーだいたい〈版画〉という言葉なんですが、これをいい出したのは、木口木版の年期奉公をつとめあげて、東京美術学校洋画の選科に学び、級友の森田恒友、石井柏亭らとともに〈方寸〉という同人雑誌を出した山本鼎が、その誌上に発表した作例をよんだのにはじまります。つまり、浮世絵の版画などの下絵・彫・刷の共同作業でなく、絵かき自身が彫ったり刷ったりするもので、はっきり創作版画ともよんでいたものです。

山本たちにつづいてヨーロッパから帰ってくる画家の試作があったり、若い日本画家が試みたり（永瀬・長谷川・恩地・田中）して、山本がヨーロッパを旅して帰る頃には、これらの新人によびかけて日本創作版画協会展（大正８年第１回）を開くまでになります。しかし、始めの頃は、殆ど、世間は、まあ、理解なかったですねえ。

版画てーとねえ、絵の半分の事を版画って云うんだろうとか、絵にならないものを版画っていうんだろうとか云うような、そのくらいのもんだった。

個人の攻撃でなしにね、あの、版画全体にね、そう云うような、言い方をされていたわけですね。

まあ、あたしの場合最初の作家群からすれば、５世代も後ですが、版画人口はもちろん初期より増えたにしろ、環境は変わっていなかったのです。ま、外から伝わるものも初期から見れば多様になり、ムンクからドイツ表現派、ケーテ・コルビッツ、そしてルオーなどに感激して、そして版画が始まっていったわけですけれども。うーん、まあ版画をとにかく、自分でやることは当然、大事だ、当り前の事だけれどもね。

人にね、こうー、版画ってものはねえ、やっぱり、こんなに、あの……、大事なもんだって云う事をね、人にも。分かってもらうような仕事をやらなきゃいけないんじゃないかなっていう、そういう気持ちを持ちましたね。

あの……、知らせるっていう事をね。

だから、極力、やっぱり自分なりにね、版画ってものをね、人に説明するようなね。そういう事も、やらなきゃいけないんだなあっていうような事をね。

あの……、頭にありました。
山本ーそうしますと、結局、絵の半分の半画というんじゃなくて、絵である版画っていう事を……
小野ーそうそう、そうですよ。
山本ー分からせるっていうような。
小野ーそうですよ。浮世絵の研究会なんかありましたから、そういう所へ入り込んだりもしましたね、

まあ、あたしの場合、学校の体験としてはね、中学校の卒業が、早稲田実業なんですよ。昭和の始めに、卒業したんですけども。その在学中に絵に向かう気持ちが出てきたのです。

小磯先生なんかと同級だった、中西利雄だとか、小山良修、新道繁、そんな連中が、やっていた蒼原会っていう、まあ、美術のアマチュアの団体みたいなものがありましてね。そこへ入り込んで。私が一番若い仲間だったわけで。そしてまあ、それがわたしの画学校になったわけで、一緒に、スケッチ会に行ったり、モデル勉強なんかして、ときどき本郷絵画研究所へデッサンをやりに行ったりして、白日会、日本水彩画会などの公募展に作品を持ち込んだりしました。木版画との縁は関東大震災(大正12)の後のいたずらみたいなものが、この蒼原会に山口進がいて、何かと教えて貰いま

した。

その後で、いいかげんの時になって、今見たようなそういうような、つまり。とにかく人に話をするという事が大事だというような気持ちが起った時に、まあ、いわば苦学みたいなような形だけけども、もう戦時中ですからね、そうやかましい規定もなかったもんだから、法政大学へ行ったんです。

で、ちょうど、太平洋戦争が始まる年に卒業してるんです。

そういうような経歴ですよ。

山本－あ……そうですか。

小野－うん。

山本－結局、そうしますと、そういう全く美術とは縁の薄いようなところから出発されて……

小野－うん。

山本－それでまあ、そういう非常に、戦時中っていうね……、そういう中で、こう、えらく混乱した中で、社会的にも皆が浮き足立っているようなわけじゃないけど、ものすごく混乱した中で。

その……、学校というものを出られて。

小野－うん。

山本－その時、こう、自分の進む道みたいなものっていうのは、もう……はっきりと、

版画とか、絵をして行くみたいな……

小野－そう、そうそう。

版画をやろっていう気持ちがありましたねえ。

まあ、合縁奇縁ていうか、なんてか分かりませんけどもね。やっぱりあの……

版画。まあとにかく興味があったんですね。

それでも、ずっと遡ってみると、今言ったようなおつきあいもあったしするから。

水彩画から、始まってね、油も描いたことあるんですよね。

山本－あっそうなんですか。

小野－うん。

山本－今、そんな作品なんかは？

小野－いや、ほとんどまあ、作品はね、一枚ぐらいはありますけどもね。まあ、ろくなものはないですけどもね。

あの……、とにかくやったことはやったんですよ。

山本－こう、戦争っていうものがありまして、そういう、先生の青春時代っていうんですか、そういうような、こう……そういう体験っていうのは、我々はしてないんですけれども、

例えば、作品なんかが焼けてしまったという、そんなような事なんかはなかったんですか？

小野－ええ、それはねえ、あの……3月10日の空襲で焼けましたからね。その時、あの……それまでにあった、戦前の作品の、版木はね、全部焼けちゃった。

山本－そうなんですか。

小野－ええ。

刷ったもので多少残って……、よそへ預けていたようなものがね。

後でもって、貰ってきたようなものがね。

例えば、ここに、お世話になった。あの、ほら、人物が居る海辺の[5]……海辺の家族のね、あの作品なんか無論、戦前の作品だから。

それから、あれもそうですよ。〈銀座裏〉(1934)ていう作品もね。あれも戦前の作品ですからねえ。無論、あの版木はありません。焼けちゃったわけですね。

山本－その……、絵じゃなくって、版画って、ある複数性をもったものですね。

小野－うん。

山本－そういうようなものだった為に、版は焼けてしまっても作品が残っているっていう事が、起きているわけですね。

小野－そうですね。

〈再出発〉

山本－それで、戦争が終って、先ほどの、美術出版社に、勤められて、というようなことで、

小野－だからその、美術出版社に勤めた時には、あたしの気持ちではねえ……。再教育だなと、自分の再教育だなっていう気持ちが非常に強かったですね。自分がもういっぺん勉強するんだなという気持ちがね、強かったですよ。

だから、作家の訪問を、盛んにやってね、その先生方から吸収して、そして、それを人に伝えるということで、洋画技法講座は、あたしなりに勉強になったわけだ。

吉本－あの……戦時中っていうか、そことつながるのかなあ。先生のね、あの、よく陰刻法ともつながるんだと思うんですけど。

あの……紙を、とにかく紙を黒くしちゃってね、

▶版画考

小野ーうん。
吉本ーで、その上にデッサンをなさいますでしょ。
小野ーうん。
吉本ー僕、1点持ってますけど、
小野ーあっ、そうですか。
吉本ーそれも、新聞紙か雑誌かなんかを。
　だから、なんか、黒く塗りつぶしちゃうと、結局、なんていうのかなあ、新聞紙でも雑誌でも、ま、白い、いい紙であろうと悪い紙であろうとみんな同じになっちゃうっていう……
小野ーそう、そう、
吉本ー……という事が、陰刻法とか。
　やっぱり、その、なんていうか、焼け出されるとか、いろんな、その生活の中で、何かあったのかなあなんて、僕は漠然と……
小野ーここも学校だから、そんな事云っちゃ悪いけれども、東京芸大に初めて勤めた時なんかも、ま、紙がね、よく、こう、そこいら中に教室に散らかってね、いるのをね、皆あたし拾ってね。
　で、こう紙をね、ほらこういうふうに集めて、そして綴じるでしょ、それで、こっちをこう、こっち側を、それを、こういうふうに折るとね、スケッチブックになるわけですよ。
　（手まねで作り方の説明をして下さる）
　それでもって、未だにそれを使っていますけれどもね。そういうような事もやってますからね、だからそういう点じゃね。
　あの……
　まあ、あたしなりにさ、新聞紙なんかだって、墨で塗ってね、墨だけでなしに、後でもって、水彩絵具でも、ポスターカラーでもいいから、上にこう、色を。あの、色で塗ってね、そして、ドウサ引きなんかしてね。そうすると、けっこう使えるんですよ。
　そんなことも、やったことがありますけどもね。
吉本ー色鉛筆で……
小野ーええ、陰刻法のためにやったわけじゃないけどもね。

（注）
〈将軍〉[1]
　将軍（原題　妄想）昭和11年（1936）作同年日本版画協会に他の3点とともに出品、第1回の日本版画協会賞を受ける。昭和58年10月東京新宿伊勢丹画廊での画業50年展に展示する。
（小野・注）

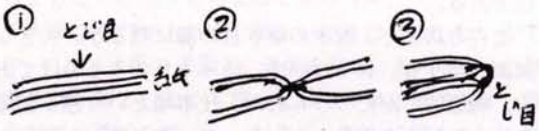
「幾山河・・・・」[2]
　若山牧水
　歌集「別離」上巻
「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」

「横浜の・・・・」[3]
　若山牧水
　歌集「死か芸術か」　落葉と自殺
「横浜の波止場の端に鳥居り、我居り、鳥われを逃れず」

「大という・・・・」[4]
　石川啄木
　歌集「一握の砂」　我を愛する歌
「大といふ字を百あまり
　砂に書き
　死ぬことをやめて帰り来れり」

「人物が居る海辺の・・・・」[5]
　海辺家族　昭和12年（1937）作

＊手作りスケッチブックのとじ方



（小野・図）

▶見学

アトリエ訪問

加藤茂外次

磯見輝夫氏をたずねて　　設楽知昭

台風の余波で、サーファーには絶好の波が打ち寄せる湘南海岸を横目に見ながら、秋晴れの鎌倉に、磯見氏を訪ねた。アトリエは、八幡宮から脇にそれた、背後に、腹切り櫓と呼ばれる洞をもつ小高い山の麓の閑静なたたずまいである。かって受験生の研究所をしていたとのことで、アトリエの床には白く番号をふった跡があった。その床は、墨色に、にぶい光沢を放っている、版木の杉板や紙が脇に置かれ、それだけで部屋の三分の一ほども占めているかのようである。

ちょうど助手の方と摺りをしておられるところだったので見学させてもらうことにした。氏の作品は大型のものが多い。版木は、縦長、あるいは横長にいくつかに分かれていて、端から順に摺っていく。かいまみたまま、その手順の簡単な説明をすることにしょう。

1．紙は適当な大きさに切って、棒にまいて、霧吹きで湿らせておく。
2．ロールにされた紙の端を固定し、第一版（いちばん端）に墨をもり、紙を版木の分だけ出して摺る。（版木の位置も見当をつけておく）
3．第二版を、最初の版の隣に密着させて、再びその分の紙を巻き出して摺る。墨をもる間、紙はロール状にして第一版の上に置いておく。

以下、順次同じように、版木の数だけ摺ってゆくわけである。

この方法だと、版木の継ぎ目の線は残るが、大きな画面の摺りも、おちついて、ゆっくりできるわけである。機能的にかたづけられた、仕事場という感が部屋全体を支配する墨色とあいまって、落ち着いた気分にさせられる。我々は、隣のアトリエとはうって変った、陽光のまぶしい応接間で、氏にお話をうかがうことにした。

設楽－僕らは、版画を専門にやっているという意識はなく、先生も大学時代は油画の専攻だったわけで、技術的なことではなく、絵として、先生の木版を見て、お話をうかがいたいと思っています。

先生が木版と関わりになったきっかけというのは…

磯見－えっと、そうですねえ、大学を卒業して4年ぐらいだったと思いますが、それまでは、油絵やったり、水彩やアクリルをやったりしていました。友達にすすめられたんですけれど、やっぱりなんか一つ制約があるということで、より自由なことができると考えました。

設楽－システムみたいなことですか、

磯見－そのときは、そう考えたのかな、それで、非常に不自由なものですよね、そういうことで、なにか変わるんじゃないかということはありましたね。

設楽－木版を選ばれたというのは、

磯見－いやー、僕は最初から木版ということで、それ以外の版種はやったことないんです。

設楽－大学時代には、版画の勉強はされていたんですか。

磯見－選択が版画と壁画とどちらかで、僕は、壁画をとったんですよね。版画には全く興味なかったんです。

設楽－おもしろいですね。現在は版画をやっておられるのに。

最初からモノクローム主体でやっておられたのですか、

磯見－最初はカラーなんかもやりましたよ。何も知らない頃は。

設楽－制約があるから逆に、自由さが出てくるというか、それは、解放されるというか……

磯見－そうですね。制約があるから何をやってもかまわないという気持ちもあるんですね。

設楽－版のしくみに頼っていけば、後は自由にできるということですね。

磯見－そうですよね。

設楽－しくみを持たずに、何をやっても構わないところだと、迷いきれないですね。

木版と出会ったときに、これだという気持ちだったんですか、

磯見－うーん、どうかなあ。まだその頃は、木版という手段を用いているというところがありましたよね。だんだんそういうことから、直接的なものになってい

きましたね。

設楽ー版画をやっているというよりは、形とか構図というものを、板に向かって彫り進みながら決定して。そこに仕事の熱があるわけですね。

磯見ーあんまり、版画だというようには感じてませんね。

設楽ーバレンを使って、刷るうちに裏から絵が見えてくるところなんか、デッサンをしているように見えます。

シルクとかリトとかいう版種は、刷るときに技術が必要で、うまく刷れないというようなこともありますよね。

磯見ーええ、どうやっても刷れます。いいか悪いかは別にして、必ず出ます。

設楽ー刷るときに、技術的にあまり苦労していくことがなくて、版画というものに縛られない……

磯見ーええ、リトなんか割と直接的な感じがするけど、木版のほうがもっと直接的だと思う。手に近いですね。

設楽ーリトだとかエッチングは製版に時間がかかりますよね。腐蝕したりだとか、ゴムをひいたりだとか……一過程ありますね。ところが、木版だと刀で彫ったときに製版がすんでしまう。直接、手でつくっているという気がします。

磯見ーそうですね、物質に向かっているという気がします。

設楽ー下絵は板に直接……

磯見ー墨で、いきなり描きます。それでそのまま彫り進んでいきます。

設楽ー刷り上がれば、左右逆になりますよね、

磯見ーあんまり深く考えないんですね。

設楽ー描いたものを彫っていく段階で、だんだんものとのぶつかりあいのなかから形が決定していく……

磯見ーええ、そうです。そこに版にする意味がある。

設楽ー微妙ですね、版を見ると。あまり深くは彫っていないですね。部分的にはかなり深いところもあるわけですが。全体はエッジの鋭いところとか、やわらかいところとか、エッジの切れ方で、墨が黒く見えたり、明るくなったり。

磯見ーええ、いろんな種類の刀がありますし、後で、彫ったあとを軽くならしたり……、それに、バレンの力ですね。

設楽ー杉板を選ばれたというのは、

磯見ーどんな板だってよかったんですけどね。合板はやめようというか、あんなに表面がきれいじゃなくたっていいんじゃないか。どんなものだって木版の材料になるんじゃないか。例えば、亀裂があったらあったでいいし、とにかく、自然のもの……、とにかく、まあ一番安かったし、豊富にあるんです。(笑) それだけのことですよ。頭から、版材はこういったものだというんじゃなくって、そういうものに囚われることはない。

設楽ー独特の杉板の木目が強く出ますね。

磯見ー最初は、あれが出るなんて、知らなかったし、あんまり、そんなこと考えてもいなかったんです。結果的に……。

設楽ー独特のもので、先生のものですよね。

磯見ー(笑) 多少はあるでしょうね。彫らなくても、自然に調子をつけてくれたり。そういうことが、それはそれでいいと思うかということですね。もっとなんか、自分の思いどうりにしていこうとか、そう考えると、そういうことを許せないだろうけど、なんか成り行きまかせというかな、例えば、紙が破れたら破れたというような、そういう気持ちになるかということですよね。刀がすべっちゃったり、版がかけちゃったりしたときに、それは失敗だったと思うか、それとも偶然、そうなったんだから、こんどは、それによって絵ができるというようなね。

設楽ーなにか大事なものがあれば……

磯見ーええ、自分が見て、これでもいいなと思えばそれでいい。なかなか、そういう気持ちには、ならないですよ。

三つの画廊で同時に、個展を開いているとのことで、話を切り上げ、一緒に会場へ行くことにした。車中、鎌倉時代末期、落武者が切腹したという、腹切り櫓のいわれなどを、淡々と語る氏に、その作品の源流をこの古都の歴史の影響下に見るのは、うがった見方であろうか？

会場に着いて、モノトーンの作品を見渡した時、杉板の木目や、屏風様の作品に、我々が幼い頃から慣れ親しんだモノへの郷愁を見てとれるが、それは、日本的であると同時に、源流としての、人間讃歌として受けとることができるのではなかろうか。

「大事なものがあれば、細かいことは気にしないんです。」という氏の言葉も、虚飾を廃し、求める道を、枝葉を切り落としながら探ってゆく作業と解すれば、墨色だけの微妙な調子や、杉板を、彫って創るという制約も、唯一無二の方法ではなかったか、という思いに至る。

杉板に、刀で立ち向かい、あるいは、慈しみ、板の手応えを確かめつつ彫っている氏の姿を、会場の作品群は想像させてくれた。

———個展は、ギャヤリー上田、ギャラリーデコール、ギャラリー77で開催され、画集が刊行されている。

(加藤)

▶各大学版画研究室

成安女子短期大学　長宗我部友子

本学に於ては、他大学の様に、版画コースは設けられておらず、又、自由選択としての版画教室と言ったものもないので、版画作家を育てるといった考え方での、版画教育は行われていない。勿論、版画に興味を持った学生で、版画作家を目指す者もいるが……。

本学には、造形芸術科として、デザイン、染織、美術の3コースが設けられており、各々が又、各専攻に分かれて行くのであるが、各コースにそれぞれ、必要とされる版的技法が、カリキュラムの中に組み込まれており、そのほとんどが、必修となっている。

私の所属している、デザインコースの立場から、版画の置かれている位置を述べてみたい。

当コースでは、特に平面の2コース（グラフイック、イラストレーション）に於て、版画手法、主に、イラストレーションと銅版が、取り上げられている。我々は、日常性を見直す為の発想の転換、視点の拡大、自分が何をどの様に考え、豊かに表現するか、と言った事を念頭に置いた上で様様な技法を取り上げ、又、様々な〝もの〟との対話を、授業として行っているのであるが、その一環として、版的手法、版の表現とその意味も主として1年次に含まれている。

2年次には、各テーマによる表現がなされてゆくが、版的手段による表現を目指す学生も多い。

版画の位置は、将来に於ても、これ以上重きに置かれる事はないと思われるが、印刷プロセスの理解として考えるならば、オフセット印刷の導入を希望している、と言ったところが、本学、当コースの現状である。

名古屋造形短期大学　加藤茂外次

当学は、洋画、日本画、彫塑、ビジュアルデザイン、インテリアデザイン、プロダクトデザイン、染織の各コースからなり、版画は洋画に属し、二年次からの専攻生11名が授講しています。洋画の一年次に、必修科目として、二週間、銅版の基礎技法講座があり、他のコースの学生も、希望者は、集中講議として授講することができます。

専攻生のカリキュラムは、リトグラフ、銅版を三週間ずつ履習し、秋には木版とシルクスクリーンを選択で、二週間履修します。各学生は三版種習得でき、その後さらに版種をしぼって、卒業制作に入っていきます。専攻してわずか一年で卒業制作をしなければならないというのは、いささかきつく、あわただしい観もありますが、短大の持つ時間不足という宿命を、効率のよいカリキュラム作制でおぎなおうと、スタッフは、模索を繰り返しています。卒業してさらに一年間、専攻生として残ることができ、それらの学生の制作を見ると、卒業制作を契機に飛躍的に伸びる学生もあり、現行の制度も一応の成果をあげているといえましょう。

現在、版画研究室は100 m²ほどの広さの中に、銅版プレス2台、リトプレス4台を備え、各版種をこなすには決して広いとはいえませんが、60年度新校舎移転にともない、版画研究室としての機能設備等も充実されることと思います。こうした中で、さまざまな方向から、版画コースのあり方が検討されているところです。

▶第8回大学版画展

園山晴己

第8回大学版画展が、丸ノ内画廊に於いて、新日本造形(株)、丸ノ内画廊、版画保存会の協賛により、7月25日から8月6日まで開催された。今回は、大阪フォルム画廊が都合により使用出来なくなったため、丸ノ内画廊のみで2週間に渡り開かれた。同時に第2回大学国際交流展の作品も展示された。今回は、会場が一ヵ所ということもあって、出品校をA、Bのグループに分けて展示されるという変則的な展示となり、少々窮屈なものになった上に搬出が2回となった為、運営上困難も予想されたが、丸ノ内画廊及び、各大学の協力に依り、スムーズに運営された。この紙面を借りて、感謝の意を表します。出品校は36校、89作品となり、作品の中から31人が買上げとなり、アメリカ、タイラー美術学校に於いて交流展の作品として出品される予定です。展覧会の印象としては、全体に作品の地方格差が無くなり、技術的に相当向上した反面、内容が類似して来たという傾向も見られた。

▶第2回大学国際交流展

園山晴己

第2回目を迎える大学国際交流展が、第8回大学版画展と同時に7月25日から8月6日まで丸ノ内画廊で開かれた。今回は予定されたアメリカ、タイラー美術学校に加えて、吹田丈明氏の尽力に依り大韓民国弘益大学校が参加し、いっそうの厚みを加えた。日本を含め三ヵ国の作品が一堂に並び、それぞれの国柄の特長も出て、興味深い展覧会となった。なお出品数はタイラー美術学校19点弘益大学校3点であった。

▶経過報告

●昭和58年度運営委員会 若生秀二

5月31日東京芸術大学版画研究室にて。

○大学版画展会場変更について。大阪フォルム画廊から、例年無料だった会場費を有料にしたいとの申し入れがあり討議した結果、有料である大阪フォルフ画廊での大学版画展の開催は不可能となり、丸の内画廊に内定する。

○国際交流展について。アメリカ、フィラデルフィア、タイラー美術学校から作品19点が到着しており、大学版画展と同じ会場で、第2回国際交流展を開催することに決定した。

●昭年58年度総会 伊東正悟

7月25日丸ノ内画廊にて。

○第8回大学版画展。出品校32校。計89点。国際交流展として、アメリカ・タイラー大学19点、韓国3点を展示。

○買い上げ賞作品は30点として、20点アメリカ側に送る。

○フランス側から返してもらった作品を参助会員に送る。

○中国側作品は、研究会の名前で町田市立美術館（60年オープン予定）に収蔵する。未決定。

●12月8日運営委員会・例会。

東京芸大研究室にて。

○大学版画展反省。丸ノ内画廊で、ひきつづき開催。買い上げ作品内訳。保存会へ20点。新日本造形へ5点。丸ノ内画廊へ5点。他会員へは1点づつ。賛助会費の集まりが悪い。

○アメリカ・タイラー大学の作品返却。日本側作品を出来るだけ早く送る。

○九州の山本文房堂から、大学版画展の地方展を開きたい申し込みあり（希望）。

○アルバム代金の回収が悪い。

○次回、国際交流展の予定であったウィーン国立アカデミーは白紙にもどす。

○韓国からの入会希望者（3人）は、一般会員として扱い、来年度に韓国との交換展をやる予定だが、引きつづき準備期間をとって検討する。

○事務局が東京造形大学から武蔵野美術大学に移管決定。

○大学版画展を61年度から町田国際版画美術館で開催する予定。それまで引きつづき丸ノ内画廊で開催してゆく。ただし町田に移った場合は9月の3～4週目くらいを当てる。

○大学版画研究の正式英文を決定した。
The Commitee of Universities of Art for Print Studies in JAPAN 略してC.U.A.Pとする。

▶経過報告

●昭和59年度臨時総会　池田良二

5月18日武蔵野美術大学大会議室にて開催。出席会員23氏ほか委任状提出会員により進められた。今年度より事務局移動の承認、清水昭八事務局長を議長として下記の議事を行った。

○会名について。新らしい会名の希望する動きがあることが吹田文明氏（多摩美大）より説明があり討議。小委員会に委嘱してアンケート調査を行う。主な意見として、版画教育の向上、研究会名では団体のイメージが弱まり地方在住会員の総会、大学版画展の出席の便宜がある他に利点として学会名にすることにより教育版画の研究発表、学術会議等の参加への基盤とし研究業績が明確に出来る。反対として学会名にすることにより版画の部会の専門性の危険性、教育系での版画以外も行なっているなど多彩な意見があった。

○大学版画展について検討し細目事項の承認。会場丸の内画廊。出品校36校。総作品数115点。会期は二つに分けAグループ、8月27日～9月1日Bグループ、9月3日～9月8日。

○海外の大学との作品交換展について。交換展の為の規定要項の作成を事務局で次回総会まで作成する。東南アジア（タイ、ビルマ）の美術大学との交換展を行ってはどうかとの意見があった。

○海外からの入会希望について。今回総会までに、海外からの入会に対する希望の連絡がないので、あったら再検討することにした。

○会報について。会報12号は中京地方が編集し、今年度8月の大学版画展開催までに発行する。

○会員の移動報告、入会申込者の承認の件、新会員に加藤清美（女子美術大学）筆塚稔尚（女子美術大学）木村繁之（多摩美術大学）佐藤行信（東洋美術学校）4氏の入会を承認した。

○各大学に所有する版画作品のリストを調査作成し研究資料の交換、貸し出の可能性について調査。

○各大学の版画教育設備の再調査。(公害対策等)

▶名誉会員名簿

小野忠重	東京都杉並区阿佐ヶ谷北2-25-16 〒166
女屋勘左衛門	東京都目黒区本町1-10-3 〒152
小磯良平	兵庫県神戸市東灘区住吉町丸山御影グランドハイツ3-411 〒658
末松正樹	東京都世田谷区奥沢2-17-22 〒158
田中忠雄	東京都東久留米市学園町1-14-34 〒180-03
平塚運一	7203 Connecticut Avenue chevy chase MD 20015USA
福沢一郎	東京都世田谷区砧8-14-7 〒157
村井正誠	東京都世田谷区中野1-6-12 〒158
脇田　和	東京都世田谷区代田4-14-2 〒155

▶会員名薄

阿部　浩	相模原市東林間7-9-5 〒228	TEL 0427-42-3070	創　形
相笠昌義	座間市立野台540 〒228	TEL 0462-54-0279	多摩美大
相沢美則	杉並区久我山5-1-22 〒168	TEL 03-334-9521	文化学院
青山光祐	山形市大字七浦497 〒990-21		山形大
秋元幸茂	滋賀県大津市稲葉台13-10 〒520	TEL 0775-25-7927	滋賀大学
朝比奈逸人	大阪府豊中市刀根山4-4 公務員住宅C-311 〒560	TEL 06-853-4269	大阪教育大
天野純治	神奈川県三浦郡葉山町長柄1601-366 〒240-01	TEL 0468-75-8689	多摩美大
有地好登	所沢市上安松221-1 〒359	TEL 0429-44-6538	日本大学芸術学部
東谷武美	埼玉県上福岡市駒林436-3 〒356	TEL 0492-63-4779	一　般
安間寛行	山口県吉敷郡小郡町大字上郷 〒754		山口芸術短大
池田良二	武蔵村山市伊奈平5-43-3 〒190-12	TEL 0425-60-1165	武蔵野美大
稲田年行	町田市三輪町1939 〒194-01	TEL 044-988-3339	岐阜大
今井治男	金沢市清川町4-10 エバーグリーン 犀川405号 〒920	TEL 0762-44-5603	金沢大
伊東正悟	柏市逆井1668-99 〒271	TEL 0471-72-7830	造形大 常葉短大
出原　司	京都市中京区姉小路堀川東入ル 〒604	TEL 075 -221-5658	京都芸大
梅津　薫	北海道岩見沢市緑が丘4-221-90 〒068	TEL 01262-4-1975	北海道教育大

▶会員名簿

梅津祐司　板橋区蓮沼7-7 ハスヌマアパルトマン
〒174　TEL 03-965-8918　芸　大

梅沢和雄　大宮市植竹町1-537
〒330　TEL 0486-66-4238　芸　大

大槻紀雄　泉市虹の丘1-18
〒980　三島学園女子大

大原雄寛　京都市伏見区日野岡西町4-53
〒601-13　TEL 075-571-6271　成安女子短大

奥定一孝　松山市東野立5-1-19
〒790　愛　媛　大

小野克子　昭島市西武蔵野1388
〒196　TEL 0425-43-0891　女子美大

小作青史　世田谷区羽根木2-32-6
〒159　TEL 03-321-7221　多摩美大

小山松隆　千葉県習志野市袖ヶ浦2-6-4-506
〒275　TEL 0474-74-6586　日本大学芸術学部

大本　靖　札幌市中央区円山西町491 1
〒064　TEL 011-611-0722　北海道教育大

太田　広　神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1-28 C-21号
〒241　TEL 045-371-2561　一　般

岡部昌生　札幌郡広島町字西の里379-211
〒061-11　札幌大谷女子短大

岡部徳三　神奈川県秦野市渋沢158
〒259-13　TEL 0463-88-0743　一　般

鎌倉伸一　横浜市金沢区並木二丁目7-3-508
〒236　TEL 045-785-4703　芸　大

神山泰治　那覇市首里石嶺町4-173-11
〒903　TEL 0988-85-5814　琉　球　大

河西万丈　山梨県大月市猿橋町殿上483-1
〒409-06　TEL 05542-2-6174　都留文科大

河内成幸　多摩市桜ヶ丘4-26-33
〒192-02　TEL 0423-71-4687　一　般

加藤清美　世田谷区桜上水1-10-3
〒156　女子美大

加藤れい子　埼玉県狭山市入間川4-25-23 ハウス2008
〒350-13　TEL 0429-53-9174　女子美大

加藤茂外次　愛知県愛知郡長久手町長湫菖蒲池37-5中尾産業アパート301
〒480-11 TEL 05616-2-5404　名古屋造形芸術短大

加山又造　横浜市鶴見区東寺尾5-3-29
〒230　TEL 045-573-6675　多摩美大

城所　祥　八王子市本町35-6
〒192　TEL 0426-22-5857　武蔵野美術学園

北岡文雄　杉並区和泉2-27-8
〒168　TEL 03-328-8361　武蔵野美術学園

清塚紀子　板橋区幸町13-5
〒173　TEL 03-955-2300　造　形　大

木村秀樹　大津市比叡平3-10-5
〒520　嵯峨短大

木村希八　鎌倉市山崎1350-4
〒248　TEL 0467-45-2223　一　般

木村繁之　国立市西2-11-2
〒186　TEL 0425-73-3025　多摩美大

久保卓治　相模原市上鶴間7-8-1-519
〒228　TEL 0427-48-7769　多摩美大

小林清子　川崎市宮前区野川4090-1野川住宅2-403
〒213　TEL 044-751-0483　女子美大

小林次男　日野市高幡566 高幡市営団地206号
〒191　東洋美術

小林基輝　埼玉県三郷市早稲田1丁目13-10
〒341　TEL 0489-58-2031　女子美大

黒田茂樹　横浜市金沢区六浦町303
〒236　TEL 045-781-4715　東洋美術

斎藤寿一　川崎市幸区塚越3-375
〒210　TEL 044-522-2007　和　光　大

佐藤逸平　鎌倉市台4-13-12
〒247　一　般

佐藤行信　武蔵野市吉祥寺東町2-6-10 和光荘6号
〒180　TEL 0422-21-8992　東洋美術大学

洒井忠臣　福岡県宗像市田熊1254-35
〒811-34　TEL 09403-7-0728　九州産業大

笹本　純　秋田市寺内児桜281-4 児桜住宅1-406
〒011　TEL 0188-33-5261　秋　田　大

坂田和之　静岡県藤枝市若王子2-14-10
〒426　TEL 0546-43-5921　常葉短大

設楽知昭　愛知郡長久手町岩作字三ヶ峰1-1 大学教員住宅4-4
〒480-11　TEL 05616-2-7447　愛知芸大

鳴　剛　大津市御陵町1-3 別所合同宿舎1011
〒520　滋　賀　大

清水昭八　小金井市梶野町4-16-27
〒184　TEL 0423-83-3733　武蔵野美大

島田章三　名古屋市昭和区高峰町143-18
〒466　TEL 052-832-9385　愛知芸大

白井嘉尚　藤枝市仮宿664 静大宿舎1235
〒426　静　岡　大

白木俊之　茨城県新治郡桜村梅園2-8-13
〒305　TEL 0298-52-0710　筑　波　大

園山晴己　世田谷区野毛2-19-2
〒158　TEL 03-701-6563　造　形　大

傍嶋康博　千葉県船橋市喜野井4-8-14
〒274　TEL 0474-63-3240　都留文科大

田中　孝　大津市比叡平3丁目10の8　京都精華大
〒520　TEL 0775-29-0530　京都芸大

田村文雄　小平市学園西町2-12-8
〒187　TEL 0423-43-7282　女子美大

武市　勝　山口県吉敷郡小郡町大正中1627-2
〒754　山　口　大

高橋貴和　宮城県名取市名取ヶ丘5-1-1
〒981-12　一　般

高山　登　仙台市鈎取上野山14-663
〒980　TEL 0222-43-2605　宮城教育大

滝沢光広　愛知県一宮市大和町代永1219
〒491　TEL 0586-44-3330　名古屋造形短大

多田益也　広島県五日市町五月ヶ丘3-14-6
〒738-08　一　般

長宗我部友子　大津市比叡平3丁目42-14
〒520　TEL 0775-29-0376　成安女子短大

津地威汎　徳島市中吉野町3-11-3
〒770　徳　島　大

辻　親造　名古屋市中村区稲葉地町7-1
〒453　名古屋造形芸術短大

嶝野寿蔵　愛媛県伊予市灘町4丁目
〒799-21　一　般

永井研治　八王子市子安町1-29-1
〒192　TEL 0426-44-4476　武蔵野美大

中林忠良　埼玉県上福岡市駒林437
〒356　TEL 0492-63-1970　芸　大

▶会員名簿

西　真　京都市北区平野上柳町28-21
〒603　嵯峨短大

野沢博行　岡崎市明大寺町字狐塚14-2サンハイツ岡崎A-407
〒444　愛知教育大

野田哲也　小金井市本町3-14-14
〒184　TEL 0423-81-9371　芸　大

長谷川光輝　鎌倉市二階堂851
〒248　TEL 0467-25-1459　一　般

馬場　章　川崎市宮前区宮崎1-5-23 峰尾ビルB-203
〒213　TEL 044-855-8217　女子美大

馬場橋男　横浜市金沢区富岡町1197-186
〒236　TEL 045-772-1770　造 形 大

萩原英男　中野区上高田5-33-8
〒164　TEL 03-386-0192　学 芸 大

橋本文良　京都市北区紫竹西北町33-12
〒603　京都精華大

浜西勝則　秦野市千村742-15 小田急渋沢ハイツ 1-508
〒259-13　TEL 0463-87-3779　東 海 大

原　健　世田谷区野沢3-13-12　造 形 大
〒154　TEL 03-421-2980　芸　大

平川晋吾　宇都宮市峰町350
〒150　宇都宮大

広畑正剛　世田谷区赤堤3-5-2
〒156　TEL 03-324-0532　玉 川 大

深尾庄介　世田谷区下馬3-17-2　造 形 大
〒154　TEL 03-414-6034　跡見短大

深沢幸雄　千葉県市原市鶴舞308
〒290-04　TEL 0436-88-2034　多摩美大

福岡奉彦　狭山市入間川4-25-23 ハウス2006
〒350-13　TEL 0429-53-7027　上越教育大学

吹田文明　世田谷区砧3-33-4
〒157　TEL 03-417-7123　多摩美大

深草廣平　佐賀市本庄町西寺小路884-3
〒840　TEL 0952-24-5191　佐 賀 大

府川　誠　平塚市平塚1037
〒254　TEL 0463-33-0210　創　形

星野美智子　杉並区善福寺1-14-10
〒167　TEL 03-390-5517　女子美大

藤岡　慎　横浜市戸塚区上郷町1707-19
〒247　TEL 045-894-4923　多摩美大

筆塚稔尚　練馬区栄町18金津賀マンション404
〒176　女子美大

細田政義　世田谷区祖師ヶ谷3-39-8
〒157　TEL 03-482-3052　女子美大

堀井英男　八王子市宇津木町940-79
〒192　TEL 0426-45-3756　創　形

前川　直　岩手県盛岡市茶畑1-1-411
〒020　岩 手 大

舞原克典　守山市川田町1548-13
〒524　TEL 07758-3-0028　京都芸大

松川幸寛　長野県松本市笹賀4359 菅野ハイツ2F
〒201　TEL 0263-86-3790　松本短大

松浦　昇　岐阜県大垣市上面二丁堤唐
〒503　大垣女子短大

松島順子　大田区田園調布4-29-25
〒145　TEL 03-721-3062　女子美大

松本　宏　神戸市東灘区渦森台3-19-7
〒658　TEL 078-841-7336　神 戸 大

丸山浩司　福島市蓬莱町68-34-3
〒960　TEL 0245-49-0903　福 島 大

馬渕　聖　神奈川県茅ヶ崎市芹沢2511
〒253　TEL 0467-51-1497　一　般

皆川孝一　東久留米市神宝町1-8-8
〒180-03　日本大学芸術学部

宮田克人　高知県高知市小津町10-41-532号
〒780　高 知 大

宮下登喜雄　府中市新町1-12　学 芸 大
〒183　TEL 0423-61-5634　福岡教育大

武蔵篤彦　名古屋市西区山木2-34-3
〒452　TEL 052-502-1472　名古屋芸大

三木淳史　市川市平田1-13-2
〒272　TEL 0473-22-1948　日本大学芸術学部

村上文生　京都市右京区太秦原面影町6-1
〒616　嵯峨短大

村山善男　弘前市御幸町16-19 キムラハウス103
〒036　一　般

森　俊夫　京都府綴喜郡宇治田原町大字岩山小字丸山1-40
〒610-02　京都文京短大

森　正一　静岡市西千代田町1-17
〒420　常 葉 大

山下哲郎　福岡市東区香住ヶ丘2-23-11
〒813　九州産業大

柳楽節子　兵庫県神戸市長田区上池田3-11-12
〒653　TEL 078-691-8354　兵庫女子短大

山中　現　北区田端1-30-4
〒114　芸　大

山野辺義雄　町田市広袴443-10
〒194-10　TEL 0427-34-5117　東 海 大

山本文彦　茨城県新治郡桜村天久保 芸術専門学郡内
〒300-31　筑 波 大

山本富章　愛知県愛知郡長久手町岩作三ヶ峰1-芸大第3住宅3-5
〒480-11　TEL 05616-2-7526　愛知芸大

山本容子　大津市比叡平3丁目10の8
〒520　TEL 0775-29-0350　成安女子短大

山口純寛　文京区千駄木5-19-3 楽山マンション302
〒113　TEL 03-821-8096　芸　大

横田嘉雄　岐阜市日野3968-352
〒500 TEL 0582-47-6552　山田学園家政短大

吉田　東　福岡市南区大字塩原226
〒815　TEL 092-541-1431　九州芸工大

吉原英雄　大阪府高槻市塚原6-18-14
〒569　TEL 0726-96-2286　京都芸大

吉田穂高　三鷹市井ノ頭1-13-40　女子美大
〒181　TEL 0422-44-3923　日本大学芸術学部

吉本　弘　愛知県愛知郡日進町岩崎元井ゲ17-97
〒470-01　TEL 05617-2-3565　愛知芸大

寥（リョウ）　修平（シュウヘイ）　284 CENTER STREET ENGLEWOOD CLIFFS, N. J. 07632　TEL 201-871-0554
SETON HALL UNIVERSITY

若生秀二　日野市旭ヶ丘1-20-19 泰山荘C-201
〒191　TEL 0425-83-0481　造 形 大

渡辺達正　八王子市鹿島22-1-208
〒192-03　TEL 0426-75-1655　多摩美大

渡辺　満　川崎市多摩区栗木台3-5-1 コーポ若草
〒229　TEL 044-987-2937　一　般

渡辺明信　文京区向ヶ丘1-2-5
〒113　TEL 03-813-9050　文化学院

若月公平　東村山市美住町2-11-1 小山マンション10E
〒189　TEL 0423-91-6407　武蔵野美大

▶ 賛助会員名簿

新日本造形	中野区新井1-42-8 〒165　TEL 03-389-1221
サクラクレパス	千代田区神田三崎町3-1-16 〒101　TEL 03-263-4221
ヌーベルセンター	千代田区神田三崎町3-1-16 クレパスビル内ヌーベル 〒101　TEL 03-262-4221
大阪フォルム画廊	中央区銀座6-3-2 ギャラリーセンタービル5階 〒104　TEL 03-571-0833
日本版画保存会	川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方 〒214　TEL 044-911-9041
渡辺木版美術画舗	中央区銀座8-6-19 〒104　TEL 03-571-4684
山田商会	中央区八重洲5-5 〒104　TEL 03-281-1667・8538
レッドランタン版画舗	京都市東山区新門前通り仲之町236 〒605　TEL 075-561-6314
萩原市蔵商店	千代田区神田紺屋町43 〒101　TEL 03-256-3591
芸大画翠	台東区上野公園12-8 東京芸術大学内 〒100　TEL 03-821-7056
ペンテル	千代田区東神田2-1-6 〒101　TEL 03-866-6161
マルチプルアートセンター（乃村工芸）	港区芝浦4-6-4 乃村工芸社 〒108　TEL 03-455-1171
ギャラリーカプセル	中央区銀座8-16-10B401 堀江強志 〒104　TEL 03-541-4676
丸の内画廊	千代田区丸の内3-2-3 富士ビル1F 〒100　TEL 03-213-8705
びけん（本店）	世田谷区尾山台3-33-5 〒158　TEL 03-702-2118
文房堂	千代田区神田神保町1-21 〒101　TEL 03-291-3441
日動画廊	中央区銀座5-3-16 〒104　TEL 03-571-2553
画荘ヴィナス	新宿区西新宿1-15-13 胖ビル内 〒160　TEL 03-346-2728
画箋堂	京都市下京区河原町五条上ル 〒600　TEL 075-791-6131
クラタ商店	大阪市鶴見区茨田諸口町1118 〒538　TEL 06-911-6561
酒井民雄	大垣市郭町3丁目 酒井書店 〒503
菊田商店	文京区本駒込3-8-2 〒113　TEL 03-821-7131
武蔵野美術学園	武蔵野市吉祥寺東町3-3-7 〒180　TEL 0422-22-8171
シロタ画廊	中央区銀座7-10-8 高橋ビル地下1階 〒104　TEL 03-572-7971～2
養清堂画廊	中央区銀座5-5-15 〒104　TEL 03-571-2471
阿部出版版画芸術	目黒区上目黒4-30-12 〒153
日本オリビエ	港区赤坂1-1-2 フランス銀行ビル内 〒107　TEL 03-582-0871

（順不同）

編集後記

昨年中に出すべきこの号が、私の怠慢により、大幅に遅れたことをお詫びいたします。何分にも不慣れな点お許し下さい。小野先生には、心よくインタビューに応じて、又貴重な時間をさいて校正をして下さり、原稿をまとめながら小野先生の知られざる一面を見たような気がします。それから、丸山、磯見両氏にも御協力感謝いたします。

（愛知芸大　山本）

会報12号が発行されることになりました。中京地方の編集部の皆様、ならびに、東京での編集に御協力をいただきました新日本造形株式会社の皆様に感謝の意を表します。本号については会則を誌面の都合で省略いたしました。12号木版画編で技法シリーズは終了いたしますが、次号よりも、より内容の充実した会報を発行いたしたく思っております。

（久保　記）

大学版画研究会　会報第12号　1984年8月

編集スタッフ　池田良二／久保卓治／小林次男／園山晴己／山本富章／若月公平

発　行　大学版画研究会

印　刷　新日本造形株式会社・有限会社 西川

文房堂の版画材料
（木版・銅版・石版）
資料をご請求下さい
東京都千代田区神田神保町1－21　TEL（03）291－3441（代）

サクラ版画絵具
SAKURA
株式会社サクラクレパス

良い版材は良い地金
版画用・銅板・亜鉛板・リト用・ジンク板・アルミ板
有限会社 萩原市蔵商店
東京都千代田区神田紺屋町43番地
電話 東京（256）3591番（代表）

版画科　1年修　石版・銅版・木版
武蔵野美術学園
武蔵野市吉祥寺東町3-3-7

石版画用ジンク研磨
版画用材料専門店 クラタ商店
大阪市鶴見区茨田諸口町1118
TEL 06－911－6561

洋画・デザイン材料・額縁・石膏像・版画
VENUS
株式会社 画荘ヴィーナス
本　店　〒460 名古屋市中区新栄町3－6
TEL 〈052〉961－0591（代）
東京営業所　〒160 東京都新宿区西新宿1丁目15－13
TEL 〈03〉346－2728（胖ビル内）

大阪フォルム画廊
本　社　大阪市東区大川町27　住友生命淀屋橋ビル8階
TEL 06－201－3041（代）
東京店　東京都中央区銀座6-3-2 ギャラリーセンタービル5階
TEL 03－571－0833

現代版画
銀座ギャラリー
カプセル
〒104 東京都中央区銀座8－16－10 B401
TEL 541－4676

日本版画保存会
川崎市多摩区登戸3460　吉沢英哲方
〒214　TEL. 044-911-9041

創業53周年
日動画廊
東京都中央区銀座7－4－12
電話（571）2553（代表）

ぺんてる
CRAYON
水彩（不透明水彩）
ぺんてる株式会社

NOUVEL
ヌーベル アーチスツ油絵具
ヌーベル エチュード油絵具
ヌーベル画用液
ヌーベル ポスターカラー
ヌーベル ドローイングインキ
ルフラン 油絵具
ルフラン画用液
ラウニー画筆
SAKURA COLOR PRODUCTS CORP.
東京都千代田区三崎町3-1-15　クレパスビル ヌーベルセンター
〒101　TEL.東京03(263)4221(代表)
大阪市東成区中道1丁目10-17　サクラビル ヌーベルセンター
〒537　TEL.大阪06(972)1241(代表)

画翠
東京都台東区上野公園
芸術大学内 ☎（821）7056

養清堂画廊
中央区銀座5-5-15　でんわ571-2471

丸の内画廊
GALLERY
〒100 千代田区丸の内3-2-3 富士ビル1F TEL 03-213-8705

〈現代版画とマルチプル彫刻〉
株式会社 乃村工藝社
マルチプル・アートセンター
東京都港区芝浦4丁目6番4号／(03)455-1171

版画専門メーカー

新日本造形(株)

東京本社　〒165
東京都中野区新井1－42－8　TEL 03-389-1221

大阪支社　〒540
大阪市東区森ノ宮中央1－6－20　TEL 06-943-1141

〈新日本造形／本社5階〉

SNZ版画工房

＊エッチング
＊リトグラフ
＊シルクスクリーン

どなたでも、自由にお使いいただける**唯一の版画工房**です。
●**毎日AM.9：00～PM.5：00**（日曜・祭日休み）
●**講師指導日**：毎週水・土曜の午後
※**プレス機、用具他完備!!**
入会金、使用料、指導料一切不要!!

大学版画研究会

事務局　武蔵野美術大学版画研究室
〒187 東京都小平市小川町1－736　TEL.0423－41－5011（内線 301）